

Title	伝説と史実
Sub Title	Legend and historical facts
Author	坂口, 昂吉(Sakaguchi, Kokichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2006
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.74, No.3 (2006. 1) ,p.167(383)- 169(385)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究余滴
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20060100-0167

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

伝説と史実

歴史の世界には、まゆつばな話が多い。研究者はこれらを史料批判のふるいにかけて、史実だけ洗いだしていく。だが伝説として切り捨てられる話には面白いものが多い。一体、伝説は歴史とは全く無縁なものであるうか。私にはどうもそうとは思われない。その証拠に、われわれ凡人は、逆立ちしても伝説を作ることには出来ない。たとえばわざと奇異なことをして、人の注意を引いてみるとうしよう。確かにその当座は周囲の人々に騒がれ、話の種にされる。しかしそれも「人の噂も七五日」で、あつてなく忘れ去られてしまう。従って後代に伝説として残る話は、史実ではないにしても、何らかの深い意義を持っていると言える。

私の好きな伝説の一つに「浦島太郎」の話がある。このように、長い年月を一瞬と思つて過ごすという物語は

坂口 昂 吉

世界に類例が多い。キリスト教の歴史にも、「七人の眠れる人々」という話がある。それは古代の末期、教会がローマ帝国の迫害を乗り切つて公認され、国教となつていく頃の物語である。

西暦二五〇年、ローマ皇帝デキウスは、苛酷なキリスト教徒迫害の勅令を發布した。当時エフェゾスの町に七人のキリスト教徒の青年たちがいた。デキウス帝はこの都市を訪れ、青年たちを呼び出し、信仰を捨てて異教の神々に生贄を捧げるようにと迫った。青年たちがこれを拒んだので、皇帝はしばらく考慮するための猶予を与えた。青年たちは町はずれにある洞窟に身を隠し、幾日もその中で過ごした。七人のうちの一人イアムブリコスという最年少の若者が、ひそかに町に出て食料の調達をしていた。この事実を知つた皇帝は激怒した。そして洞窟

の前に石をおいて入口を閉じてしまったのである。こうして青年たちは葬られてしまった。ただ、あるキリスト教徒が七人の青年の殉教をいたみ、彼らの事跡を鉛板に記して洞窟の入口に置いた。

かくて二〇〇年の年月が過ぎていった。その間にローマ帝国の迫害は終わり、キリスト教は帝国の国教になった。そして皇帝テオドシウス二世（在位四〇八―四五七）の時代になった。その頃あるエフェゾスの市民が、羊の檻をつくる材料にするため、かの洞窟を塞いでいた石を取り除いたのである。洞窟の中に日光が差し込んだ。神はその時、七人の青年たちに生命の息吹きを送り込まれた。かくて彼らは長い眠りから醒めた。そしてまる一晚眠っていたと思い、空腹を覚えたので、例によってイアマブリコスイアマブリコスを町に遣わして、食物を買うことにした。

ところが町に出たイアマブリコスは、以前とは打って変わったその様子に驚いた。特に、到るところに十字架の印が見られ、キリストの御名が語られていた。それは迫害時代には考えられない光景であった。彼はともかくパンを買おうとした。しかしパン屋は、若者の異様な風体と言葉に面くらしい、彼が差し出したデキウス帝の肖像を刻んだ昔の貨幣を見て仰天した。そこで若者は昔の財

宝を着服したと思われ、捕らわれたのである。

こうしてイアマブリコスは、司教と官憲に調べられた。しかし彼の申し出に従って、洞窟の調査が行われ、鉛板の碑文も読まれ、すべてが明らかとなった。皇帝テオドシウス自身も洞窟の前に来て、七人の青年と対面した。彼らはこもごも語った。「陛下、いま異端が起こっています。そのために主なる神は私たちを復活させ給うたのです。私たちが聖パウロの肉身の復活に関する教えをあなたに告げるためです。」こう語り終ると、彼らは再び静かに眠りについたのである。

この物語は、シリアの司教サルグ（四五二―五二二）とトゥールの司教グレゴリウス（五四〇―五九四）が記録している。さらにイスラムの聖典「コーラン」（七世紀）にも書かれている。すなわち、この伝説は発生とほぼ同時代に記録されたのである。この文書化の早さの理由は、それが当代の教会史上の重大問題にからんでいたためであった。

七人の青年が皇帝テオドシウスに語った言葉にみられるように、当時、肉身の復活に関する教会の教えを否定する異端が猛威をふるっていた。これは四世紀末から六世紀前半までに展開した「オリゲネス派」である。この

異端の中心的教説は、世の終わりに肉身が復活するとう教えを否定するものであった。また一步譲って肉身の復活を認めるとしても、この復活する肉体は、現世におけるわれわれの肉体の如く、空間に拡がりを持ったり、五感に感じられたりすることのない、精神か靈に等しいようなものである、と説いたのである。このような異端説に対し、正統派の教会は、世の終わりに肉身が復活すると説くのはもちろん、この復活する肉体は、七人の青年が長い眠りから醒めて蘇った如く、現世の肉体と寸分違わない、と主張したのである。そしてこの激烈な論争は、五五三年、第二回コンスタンティノポリス公会議で最終的に決着した。聖パウロのコリントへの手紙一、一章五章五一―五二節「わたしたちは皆、永遠に眠りにつくわけではありません。最後のラツパが鳴ると、死者は復活して朽ちない者とされるのです。」はこの問題に対する見事な解答であった。

したがって「七人の眠れる人々」の物語は、伝説であるにしても、取るに足りない史実をはるかに越えて、歴史における重大な思想的発展の実態を示しているのである。